

2015年8月7日

ある僧侶の転機

通常 50 歳になると仕事での先が見えるものである。現在の仕事の役職や収入を維持するにしても、さらなる昇進に向けて出世街道を進み続けるにしても、いずれにしても、ほとんどの人は現在の職にとどまることを好むものである。それは家族を守るためであり、またはこれまでの人生で得てきたものを守るためでもある。

ところが、酒井圓弘氏はそうではない。現在 52 歳の彼は、まさにその出世街道から飛び出そうとしている。このような経験は彼の人生において 2 度目となる。今回彼は 1,000 年以上の歴史を持つ妙乗院の住職という現在の地位を捨て、全く新しい世界に飛び込もうとしている。それはアジアの発展途上国に孤児院を創設するというものだ。

「今後 2, 3 年かけ現在手掛けていることを進め、5 年以内にすべてを完了させたいと思っています。」住職は東京でのインタビューに答えてそう語る。

妙乗院は西暦 968 年ごろ、愛知県に天台宗の寺として建立されたという記録が残っている。住職という地位は寺の中で最も高い階級であり、仏教僧侶のキャリアにおいては最終目標と考えられている。

酒井氏が住職となって 10 年、彼が望めば天台宗の僧侶の階級を上り続けることは可能だ。しかし彼はそうではない道、つまり自分自身の人生を歩む道をむしろ選んだ。

彼は仏教の経典と原理を教えてくれた祖父に従い、22歳の時に京都の寺院で出家した。その後、20代半ばまで普通の僧侶であった。

商家に生まれた彼は、7歳で両親の離婚を経験した後、母と兄とで暮らした。生活は楽ではなかったが、決して不平を言うことはなかった。高校を卒業し4年間食品会社で働いた後、僧侶になる決心をした。

京都の寺で修行中に、大きな転機を迎えた。一緒に修行していた友人の僧侶が自殺をしたのだ。それは、酒井氏が彼と話をした、たった2週間後のことだった。

酒井氏は回想する。「彼は私と似ていました。あまり自己主張する人ではなかったため、彼が何を求めているかがわかりませんでした。」

酒井氏は、友人のサインを見逃したことで自分を責め、そのことで長い間苦しんだ。

この衝撃的な出来事がきっかけで、酒井氏はそれまで学んだ全てを捨てることにした。彼は宗派を変え修行を一からやり直すことを決めた。天台宗総本山である比叡山延暦寺で2年間の非常に厳しい苦行を終えた後、29歳の時に妙乗院に入った。

住職は、荒れ果てていた妙乗院を、聖なる場所として公開し見事に立て直した。寺院の庭に滝を造り、僧侶の滝行を経験するチャンス一般の人々に与えている。悩める人々の話を聴く。禅の教えを説く。ペットの追悼さえ行う。

しかし今、彼はそれらの活動に終止符を打とうとしている。全てを息子に譲り、それをどうするかは息子に委ねる、と住職は語る。

「これまで私の人生を通して、私はずっと他人の気持ちばかりを考え、自己主張することはありませんでした。それはちょうど私が救うことのできなかった友人の僧侶と同じです。私はそれを変えようと思っているのです。」

彼の人生の最終章を飾るもの、それは彼が長年思い描いた計画だ。カンボジア、ミャンマー、フィリピンなどの東南アジアの国々に現地の恵まれない子供たちのための小さな孤児院を作るというものだ。それぞれの孤児院には10人ほどの子供たちを住ませ、現地の学校に通わせ、病気の時には現地の病院で治療を受けさせる。その孤児院は子供たちにとって避難所のようなものになるだろう、と住職は言う。

その計画を実現するために、住職はサンフランシスコに禅道場を作るためのNPOを今年設立する予定だ。彼の計画のための資金集めの一環として、これまでの僧侶としての長年の経験を生かし、真の禅の精神を広める、というものだ。

「私の夢を実現するチャンスの、ようやく入口に到着しました。環境が整ったのですから前に進むしかありません。」と、住職は語る。